

第14回岐阜大学教育セミナー 教育講演

期日：2009年1月29日(木) 21:00～23:00

場所：岐阜大学応用生物科学部1階・第101講義室

<http://www1.gifu-u.ac.jp/vethspt/>

犬の癢痒性皮膚疾患に対する 臨床アプローチ

—アレルギーを診断する前にすべきことは何か?—

前田 貞俊

岐阜大学応用生物科学部獣医内科学研究室

はじめに

膿皮症やアトピー性皮膚炎 atopic dermatitis に代表される犬の癢痒性皮膚疾患は、日常の診療で最も頻繁に遭遇する疾患である。癢痒の原因のほとんどは炎症に起因していることから、副腎皮質ステロイドホルモン剤の投薬は癢痒感を迅速に軽減させるという意味で有効な治療法ではあるが、本治療は根治療法ではなく対症療法にすぎないことを忘れてはならない。言い換えれば、副腎皮質ステロイドホルモン剤による症状改善は一時的なものであって、安易な投薬は病因によっては症状を悪化させる場合もある。したがって、癢痒性皮膚疾患に遭遇した場合には炎症を引き起こす原因を可能なかぎり明らかにし、病態に基づいた治療を最優先させる必要がある。今回は癢痒性皮膚疾患に対する鑑別診断法を総復習しながら、臨床的対応の実際について解説する。

病歴聴取

皮膚科診療においては、詳細な病歴の聴取が鑑別診断を進めていくうえで重要となる。岐阜大学に来院する症例の多くは皮膚症状の悪化と改善を繰り返し、転院を繰り返していたという経歴を有しており、それまでにさまざまな検査や治療を受けていることが多い。したがって、詳細な病歴の聴取により、これまでに行った検査の結果や受けてきた治療内容などからある特定の疾患を類推で

きる場合もあるし、それらの検査の意義や治療内容に関する飼い主の理解度も把握することができる。系統立った問診を励行するためには、皮膚科用カルテを別途作成するのがよいであろう(図1)。

「痒み=アレルギー」と短絡的に考えがちであるが、岐阜大学に来院する症例の約3割程度は抗生物質耐性ブドウ球菌による膿皮症や寄生虫性疾患(疥癬および毛包虫症)などが原因で症状を発現していることから、それまでに行われていた治療内容(抗生物質の種類や寄生虫に対する治療の有無など)を知ることは、これらの疾患を鑑別する際に非常に役立つ。また、旅行歴(ペットホテルも含めて)、ほかの犬との接触歴、同居動物または飼い主の皮膚症状の有無(図2)などは、感染性皮膚疾患を診断するときに参考となる場合が多いため、必ず聴取したい。

感染症に対する治療が適切に行われているにもかかわらず癢痒感が残存している症例、また、初発年齢が3歳未満であったり、癢痒発現パターンに季節性があることが明らかになった場合は、アレルギーの関与を疑うべきであろう。最近の研究では、15カ月齢までにアトピー性皮膚炎様皮膚病変を発症した犬は、将来アトピー性皮膚炎に罹患する危険性が高いことが示されている¹⁾。逆に、7～8歳で臨床症状を初発した症例がアトピー性皮膚炎である可能性はかなり低いと考えてよい。最近では来院時にすでに除去食が与えられている症例が多いが、給餌期間や間食または盗食の有無なども聴取し、除去

《皮膚科カルテ》

日付： _____

名前 _____ カルテNo. _____
 性別 オス () メス () 去勢オス () 避妊メス ()
 年齢 _____ 犬種 _____

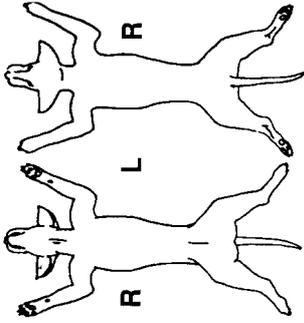
《問診》

- 主訴 _____
- 初発年齢 _____
- 季節性 _____
- 病変部の経時的変化 _____
- 痒痒感の部位 _____
- 同居ペットの有無 _____
- ノミの有無 _____
- 生活環境 _____
- 検査歴
 皮内試験 (IDT) (未、済) 日付： _____ 結果： _____
 IgE (未、済) 日付： _____ 結果： _____
 Biopsy (未、済) 日付： _____ 部位： _____
 その他： _____
- 治療歴 _____
- 食事内容 _____
- 発情 _____
- 既往歴 _____

《耳》瘻瘻 R _____ L _____

《被毛の状態》 _____

《病変部位》



《原発病変》

- 水疱 (Bulla) 2 マキュール斑 (Macule) 3 結節 (Nodule) 4 丘疹 (Papule) 5 斑点 (Patch)
 - プラーク (Plaque) 7 膿疱 (Pustule) 8 腫瘍 (Tumor) 9 小疱 (Vesicle) 10 膨疹 (Wheal)
 - 紅斑 (Erythema) 11
- 《続発病変》
- 膿瘍 (Abscess) 12 脱毛 (Alopecia) 13 胼胝 (Callus) 14 面ぼう (Comedone) 15 痂皮 (Crust)
 - 嚢胞 (Cyst) 17 表皮小環 (Epidermal collarette) 18 びらん (Erosion) 19 潰瘍 (Ulcer)
 - 表皮剥離 (Excoriation) 21 裂傷 (Fissure) 22 角化 (Hyperkeratosis) 23 色素沈着 (Hyperpigmentation)
 - 色素減退 (Hypopigmentation) 25 苔癬化 (Lichenification) 26 鱗屑 (Scale) 27 癒痕 (Scar)

《痒みの点数》

- 自分で掻くことはないが、普通のイヌがやるように時々掻く程度。
- 時々自分で掻いたり噛んだりするが、我慢できる。
- 自分で掻いたり噛んだりするが、我慢できる程度。
- 頻繁に自分で掻いたり噛んだりし、しばしば激しく動き回る。
- 常に自分で掻いたり噛んだりし、極めて具合が悪いようだ。 点数： _____

《検査》

Ear swabs : R _____ L _____ Wood 灯 : _____

スクラッチ : _____

皮膚の細菌 _____

内分泌 ACTH 刺激試験 : pre: _____ post: _____ 評価: _____
 甲状腺ホルモン値 : T3: _____ T4: _____ FreeT4: _____
 TSH : _____ 評価: _____

問題点 _____

その他 _____

図1 皮膚科診療用カルテの一例 (岐阜大学で使用しているもの)